

点字図書館利用者のニーズに関する研究

立花 明彦

研究の背景と目的

厚生労働省の認可を受けた 73 点字図書館の利用実績は、一部の大手の館を除き低い利用状況となっている。その原因は種々あるが、次の 2 点のことが大きく起因すると考えられる。その一つは、利用者の読書の傾向やニーズを的確に把握し、これをサービスに反映してこなかった図書館界の対応の問題であり、残る一つは利用者である視覚障害者が受動的で、「与えられる読書」に終始していることである。

一方、筆者（2001）の点字図書館における貸出促進の要因に関する研究結果からは、日本十進分類法別にみる利用者の読書の傾向、および貸出の多少を引き起こす要因が年間増加冊数や図書の選書にあることが示唆された。年間増加数や選書においては、利用者の読書の好み等、ニーズを的確に把握することが求められる。公共図書館では、伊藤（1984、1995）がこの点についての興味深い研究を行なっている。また海外においても、視覚障害者を対象とする図書館で、欧米を中心に図書館の蔵書を改善・開発する目的で、調査・研究が 1970 年代の初めごろから取り組まれている。それらは、電話や直接面接などの調査法によって、年齢別の視覚障害者の読書の好みを分析するとともに、図書館サービスの満足度などを明らかにしようとするものである。しかし、わが国の点字図書館界では、ほとんど例がない。

本研究は、海外では既に取り組まれているが、わが国ではほとんど実施されていない点字図書館の利用に関する調査を行ない、これによって視覚障害者の読書の好み、求められている図書館の資料・サービス内容などの実態を明らかにしようとするものである。

手続き

(1) 調査対象

点字図書館における貸出促進の要因に関する研究において、対象とした点字図書館に登録している利用者。

(2) 方 法

調査票を館に郵送し、さらに館から各調査対象者に送付し、記入後返却してもらった。

結 果

(1) 対象者の概要

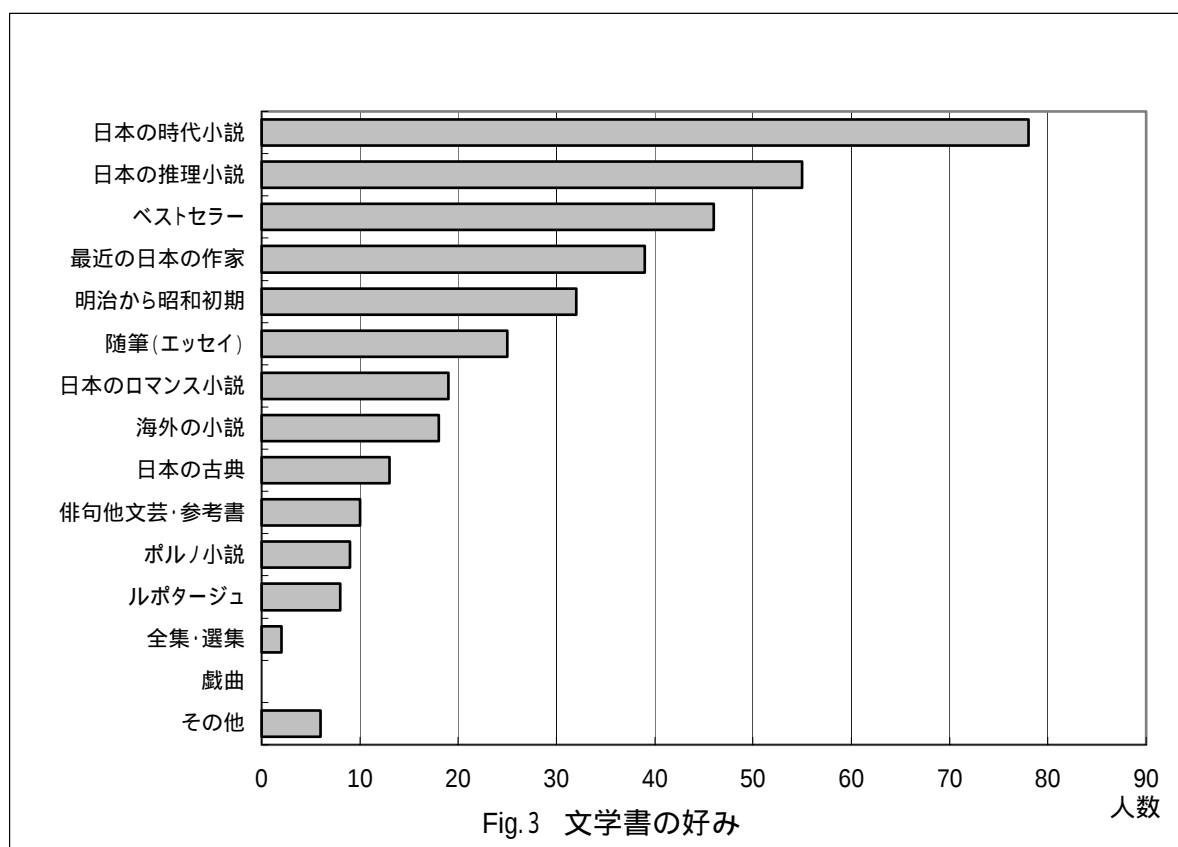
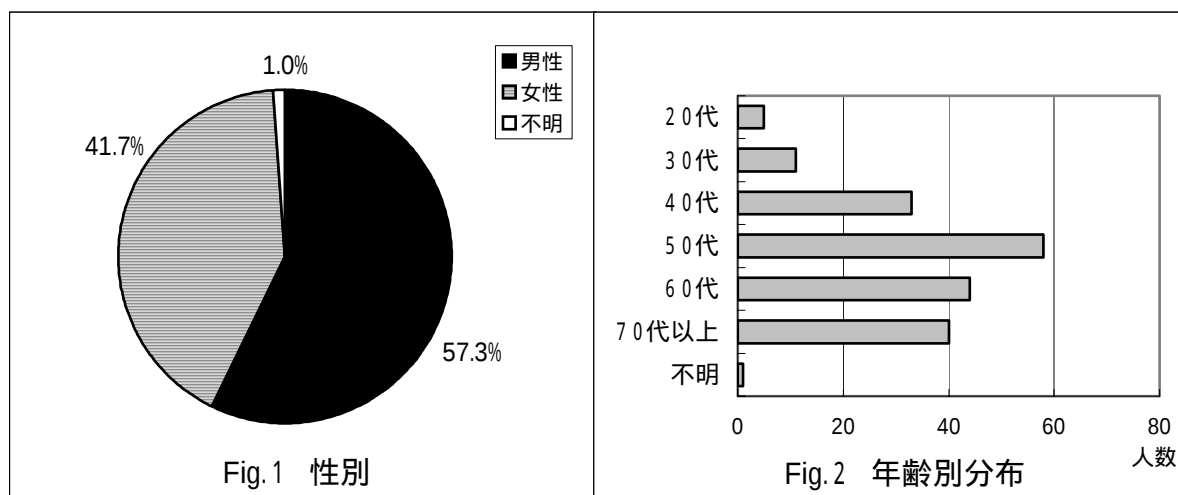
調査票は、200 名程度のサンプルを望んだ。そこで視覚障害者への一般的な調査の回収率を参考にして調査票を配布した。192 名から回答を得ることができ、目標数に近いものとなった。

性別は、男 110 人（57.3%）、女 80 人（41.7%）、不明 2 人（1.0%）であった（Fig.1）。これを年代別にみると、50 代が 58 人（30.2%）と最も多く、60 代の 44 人（22.9%）、70 代以上の 40 人（20.8%）、40 代の 33 人（17.2%）と続く（Fig.2）。これは、わが国で最多の利用者をもつ日本点字図書館の登録者の年齢構成比にほぼ等しい。

(2)点字・録音図書の利用状況

貸出数を日本十進分類法別に調査した結果によって、利用の多い分野は文学であり、他よりも突出していることが既に明らかになっている。そこで利用者への調査では、文学書における好みや不足を感じるものを細かく調べた。

文学を15のジャンルに分けて提示し、その中からよく利用するものを挙げてもらった問いでは、「日本の時代小説」78人(21.6%)、「日本の推理小説」55人(15.2%)、「ベストセラーの小説」46人(12.7%)、「最近の日本の作家の小説」39人(10.8%)の順で上位を占めた。利用者が登録している点字図書館には、文芸クラブのあるところもあって俳句や短歌を楽しんでいるが、これらに関する図書の利用は10人(2.7%)という低い結果であった。このほか、日本の古典、ポルノ小説、ルポルタージュは、それぞれ2～3%台で同様に利用の少ない分野であった(Fig.3)。



考 察

全国的に、点字図書館利用者の何割かは、複数の館に登録しているとの実態がある中で、本調査では約9割が「地元の点字図書館のみの登録」という結果を示した。地元館への依存度の高さを示しているように感じられるが、貸出やこれ以外のサービスの利用状況をみる限りでは、必ずしもそうとは言えない。ミューレー（1995）らによるオーストラリア・ビクトリア州のR V I B録音図書館の調査では、半数近い人々が他の図書館も利用しており、また、30%の人々は公共図書館からサービスを受けているという事実が明らかにされている。オーストラリアでは、障害者に対するサービス法（Disability Services Act, 1986）が施行されていて、公共図書館での障害者に対するサービスが充実しているという。この種の法のないわが国においても、近年公共図書館で「図書館利用に障害のある人々へのサービス」として視覚障害者等へのサービスが取り組まれるようになった。にもかかわらず、調査では公共図書館へも登録しているとする回答は皆無に等しかった。これは、公共図書館での取り組みがまだ首都圏や近畿圏、中京圏など、一部の地域でしかないことと、実施されていても、そのサービスが貧弱であるか、あるいは点字図書館と変わらないサービスであることを示唆するものである。

田中（1991）の研究によって、点字図書館では文学書の貸出が他の分野よりも大きく突出していることが指摘されている。それはまた、筆者の点字図書館における貸出促進の要因に関する研究の調査でも裏付けられた。しかし、文学書での利用者の好みについて述べたものはほとんどない。本調査の結果、文学書、ならびにこれ以外の分野における利用者の図書の好みが見えられた。文学書では、日本の時代小説、日本の推理小説、ベストセラーの小説、最近の日本の作家の小説が上位に位置し、これらをよく利用していることがわかった。前出のミューレーも、図書をフィクションとノンフィクションに分け、それぞれいくつか項目を提示し、その中からよく利用するものを挙げてもらう方式で読書の好みを調査している。その結果、フィクションでは冒険物語・家庭的なもの・ロマンス・西部ものといったオーストラリアの小説が最も人気のあるものとして挙げられている。自国の小説への好みが多いことは、本調査と共通する。

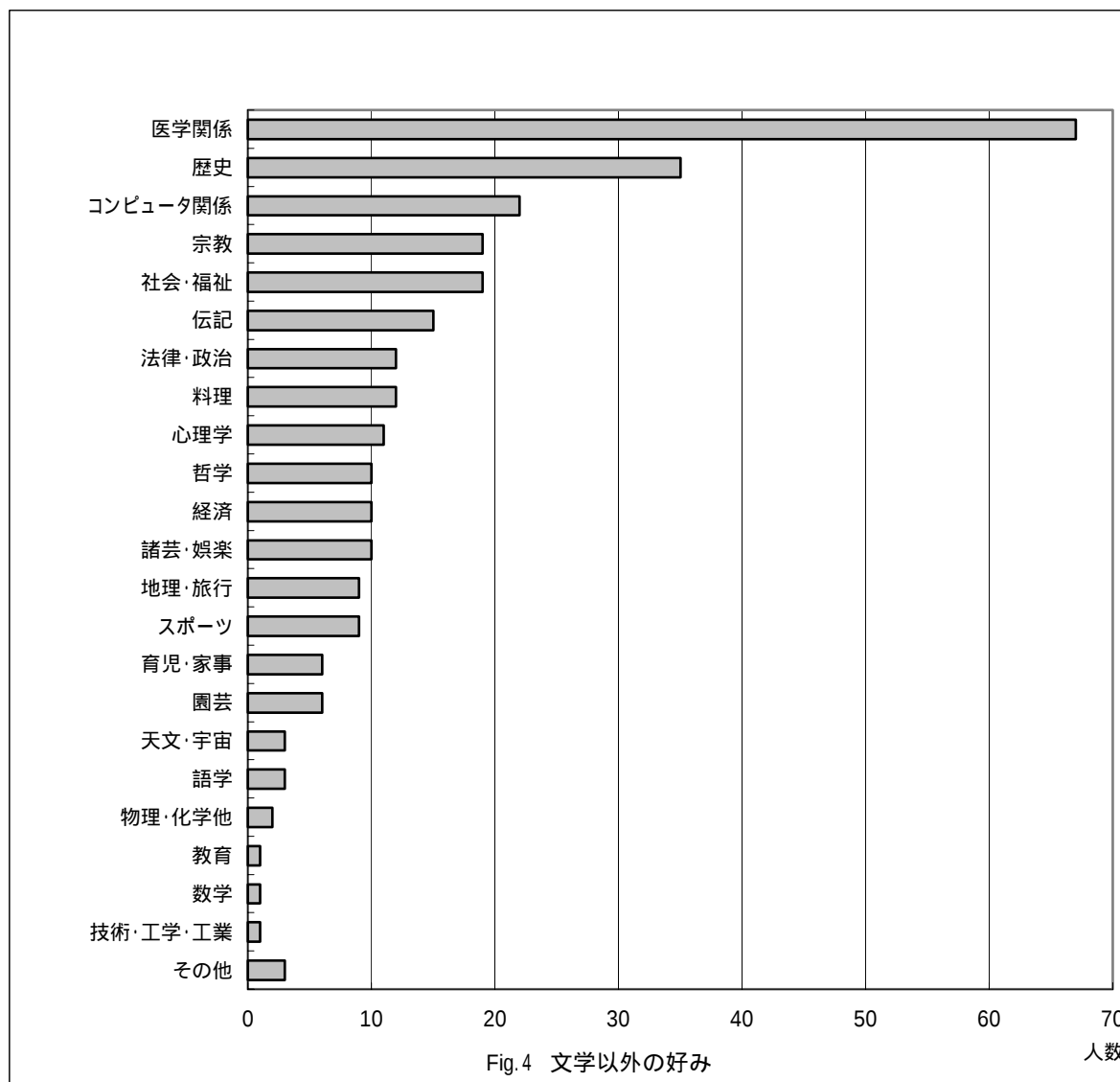
文学書以外では、「三療を中心とする医学関係」の図書を最もよく利用するという結果が見られ、貸出促進の要因に関する研究での貸出数の調査を裏付けた（Fig.4）。三療を中心とする医学関係分野は、図書・雑誌を含め、よく利用するものとして挙げられ、また不足の分野としても最も多くの回答が寄せられた。その貸出数は文学に次ぐものの、この間の隔たりは非常に大きい。とはいえ、この結果は視覚障害者の職域を反映したものであり、軽視することはできない。

回答者の約半数の人々は、文学書以外の図書に対して不足を感じていないとする結果が見られた。文学書に偏った読書傾向を象徴する結果のようでもあるが、文学書における不足の問いでも89名（46.4%）が回答していない。これは、蔵書に満足していると解釈するよりは、受動的な利用者が多いことを物語る結果と判断すべきである。

今後の課題

館によって多少異なる点はあるものの、点字図書館では、貸出以外にいくつかのサービスを実施している。これらの利用状況は驚くほどに少ない結果が見られた。その一つである対面朗読は、視覚障害者の読書手段として、即時性や読んでもらう図書・資料の不明な点の確認ができるなどその有効性が認識され、公共図書館を含め多くの館で実施されるようになっている。本調査での地元館で実施するサービスとして知っているものを挙げてもらった問いで対面朗読は、最も高い結果を示した。しかし、実際の利用では非常に少ない。首都圏や近畿圏での利用の多い状況などから考えるならば、この結果は、単にこれに対するニーズが

少ないというよりは、図書館までのアクセスなど、視覚障害によって発生する歩行上の問題等が影響していると考えられるべきであろう。今後は、この点を検証し、その結果を踏まえ、点字図書館のあるべき姿を検討していく必要がある。



参考文献

伊藤昭治(1984):大規模開架の公立図書館において1度も読まれなかった本の分析.日本図書館研究会,図書館界,36(3),P166-175.

伊藤昭治(1995):利用者の変化とそれに応えるサービス.日本図書館研究会,図書館界,47(3),P163-170.

J. Murray, T. T. T. Huynh, K. Williamson(1995): A Needs-Analysis Survey of Users of an Audio Book Library. Journal of Visual Impairment and Blindness, Mar-Apr, Vol.89(2),P161-165.

立花明彦(2001):点字図書館における貸出促進の要因に関する考察.点字図書館問題研究会,点字図書館問題,No72,P4-8.

田中徹二(1991):視覚障害者の読書傾向.日本特殊教育学会第29回大会発表論文集,P20-21.

(2003年3月19日 受理)